

2014年度入試の問題分析

① 出題傾向 一文章読解力と言葉の知識が問われる一

公募制推薦入試・一般入試ともに、文脈の正確な読み取りや論旨の的確な把握といった、文章読解力の基本が主に問われると同時に、漢字・慣用表現などの言葉の知識が問われる。問題文は評論が中心。確かな語彙力のもと、文章の内容を論理的に整理しながら読み解き、理解する文章読解力の有無が得点に大きく反映すると言ってよいだろう。

② 出題内容 一公募制推薦入試、一般入試ともに客観問題が中心一

現代文は大問2題を基本的な構成としている。公募制推薦入試の一部の日程では大問Ⅲが設定されることもあるが、これは慣用句などの語句知識問題となっている。大問一つあたりの設問数は概ね8～9問。設問は、記号で答える客観問題が中心だが、一般入試 前期A日程および前期B日程では20字～90字程度の記述問題が出題されたり、抜き出し問題、書き取り式の漢字問題も出題される。

③ 難易度 一全体として標準的な出題一

設問は漢字、語句の意味、語句の空欄補充、傍線部内容説明、傍線部理由説明、本文の趣旨判定など、難問・奇問の類はなく、一般的な私大の構成・難易度と言ってよい。漢字や語句の意味問題などの知識を問うものと、本文および傍線部の精緻な読み取りができたかを試すものがバランスよく配置されている。公募制推薦入試の場合も出題される本文の難易度には一般入試も大きな差異はない。やや硬質で読みにくい本文が出題されることもあるが、試験時間に比して設問数はそれほど多くないので、じっくりと本文と向き合って精緻な読解に努めることができるだろう。

学習アドバイス

① 公募制推薦入試は、読解力の養成と国語の基本知識の整理を中心に

公募制推薦入試では、私大向けの標準型の問題集などを通じて、指示語、接続語を手がかりに文脈を正しく辿りながら、論旨(筆者が主張しようとしていること)を的確に把握する読解練習を十分に積んでおこう。また、選択式の漢字問題が必ず出題されている。これは実際に書き取る問題よりも多くの漢字、熟語の知識が要求されるため、選択問題だからといって安易に考えてはいけない。語句の意味を直接問うような問題も出題されるので、標準レベルの漢字問題集を一冊でも良いから繰り返し取り組み、わからない言葉はその都度辞書を引いて、覚えるという習慣を身につけよう。自分の語彙力に自信がない人は、市販の現代文用語集などを持ち歩くなどして、ちょっとした空き時間などに活用するのもよいだろう。

② 一般入試は、論理的な読解力と記述力の養成がポイント

本学の現代文は、難問・奇問の類はなく、練習を重ねれば重ねるほど成果を上げることのできる入試問題である。言い換えれば受験生の努力が実りやすい問題だということでもある。設問対策としては、私大向けの標準的な問題集や本学の過去問題などを通じて、文章と文章、あるいは段落と段落との論理関係、つまり本文全体の構造に気づいていく練習を数多く行おう。また、練習問題や過去問を通じてその本文から多くの語彙(知識)を吸収してほしい。もちろん一般入試の場合は漢字問題の書き取り練習も丁寧に普段から行っておくこと。

特に、出題数の多い空欄補充問題や抜き出し問題については重点的に対策を講じておきたい。空欄補充問題は「前後の文脈の精読」、「文脈の対応関係」に注意して解く練習をすればよいだろう。ただし、抜き出し問題は慌てず設問文も十分に読むこと。一文から抜き出すのか、そうでないのか。あるいは、特定のページの中に限定して抜き出すなど、解答に至るための条件がさまざまに指定されていることも本学の場合は多い。記述問題が苦手な人は多いと思うが恐れすぎることではない。解答に必要な「材料(解答のポイント)」を集める。これは選択式の他の読解問題となら変わりはないからだ。まずは設問文を良く読んで「いま何が問われているのか」を正確に把握しよう。また、ポイントを掴めても、上手く整頓して書けない。そんな経験をしたことがある人は多いだろう。これについては、過去問などで演習する際、下手でも良いから自分なりの答案を書く練習を重ねること。そしてポイントを中心に模範解答とじっくり見比べるという練習を続けることである。何度も繰り返し練習していくことで、得られた解答の材料を使いこなし、解答欄・制限字数に合うように文章を組み立てることが少しずつできるようになる。